

アズニメーション Ver. Pink BAD END!!

★アズニメーションで喘ぎまくり!
滑らかモーションで大量ガッカリ!

★連続差分CGシナリオでさらに深く犯す!
快樂堕ちの桃色敗北BAD END!!



俺の前に緑色の薄汚い老婆が現れたのは、
みゆきが進学して新しい制服を見せに来たあの日、
あの取り返しの付かない日の、前日だった。

「過去にさかのぼるなんて造作もないことだわさ！
さあ、おまえはこの薬を使って、おまえの好きな
あの子を自分の思うようにするだわさ！」

大学を卒業してから職もなく、家で鬱々としていた
俺の唯一の味方だったみゆきを、
大人になる前に自分のものにしたいと思った。

この「キモチヨクナール」というふざけた薬で
みゆきを……………







「お、お兄ちゃん……？」

みゆきは近所に住む星空さんちの娘だ。
小さい頃よく一緒に遊んで、みゆきは俺の妹みたい
だと皆に言われていた。

進学した学校の制服を見せびらかしにきたみゆきは
俺にベッドに押し倒されてすこし困った顔を見せる。

「お兄ちゃん、どうしたの……？」

俺は老婆から貰った薬の小瓶を口に含むと、
口移しでみゆきの唇にそれを注ぎ込もうとした。







「んっ……」

みゆきの顔がちかくなり、目をつぶる。
心臓の鼓動以外聞こえなくなるほどの緊張の中、
俺の唇が彼女の柔らかい唇に触れる。

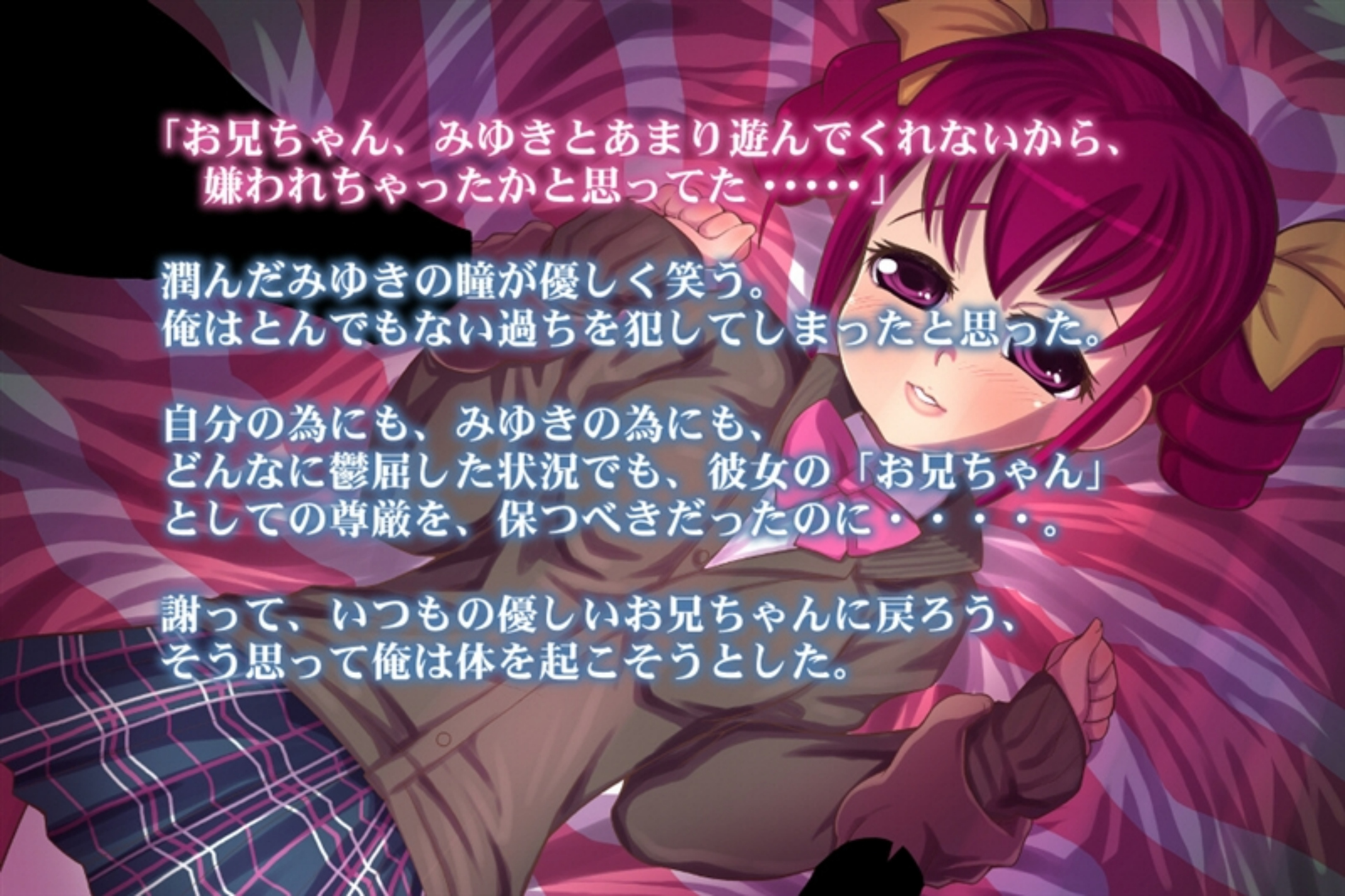
暖かくて小さい唇。
緊張で体が固まっているのか、抵抗しないみゆき。

舌で唇を押し上げ、薬をみゆきの口の中に流し込む。
効くかどうか分からないこんな薬の為に、
俺は大好きで大事なみゆきを押し倒して唇を奪った。

「……キス、しちゃった……」







「お兄ちゃん、みゆきとあまり遊んでくれないから、
嫌われちゃったかと思ってた……」

潤んだみゆきの瞳が優しく笑う。
俺はとんでもない過ちを犯してしまったと思った。

自分の為にも、みゆきの為にも、
どんなに鬱屈した状況でも、彼女の「お兄ちゃん」
としての尊厳を、保つべきだったのに……。

謝って、いつもの優しいお兄ちゃんに戻ろう、
そう思って俺は体を起こそうとした。







ビッ!

しかし、俺の体にも流れ込んだ薬は、
快楽を求めてみゆきの服を剥ぎ取っていく。

「やっ! おにいちゃん! な、なにをするのお!」


強引に引き剥がされた制服の下から
みゆきの柔肌が見える。

「ごめん、ごめんみゆき・・・ごめん・・・」

俺は謝りながら彼女を丸裸にしていた。







「な、なんで・・・？なにをするのおにいちゃん？」

裸にされたみゆきはこれから起こる事が
予想できずにいるようだった。

みゆきはすこし能天気というか、遅れていたの
でこういう行為の意味をこの年になって知らなくても
俺にとっては不思議じゃなかった。

「大丈夫・・・大丈夫だよ・・・」

俺はもう性の快楽に支配されてたまらない気持ちに
なっていた。





あーん

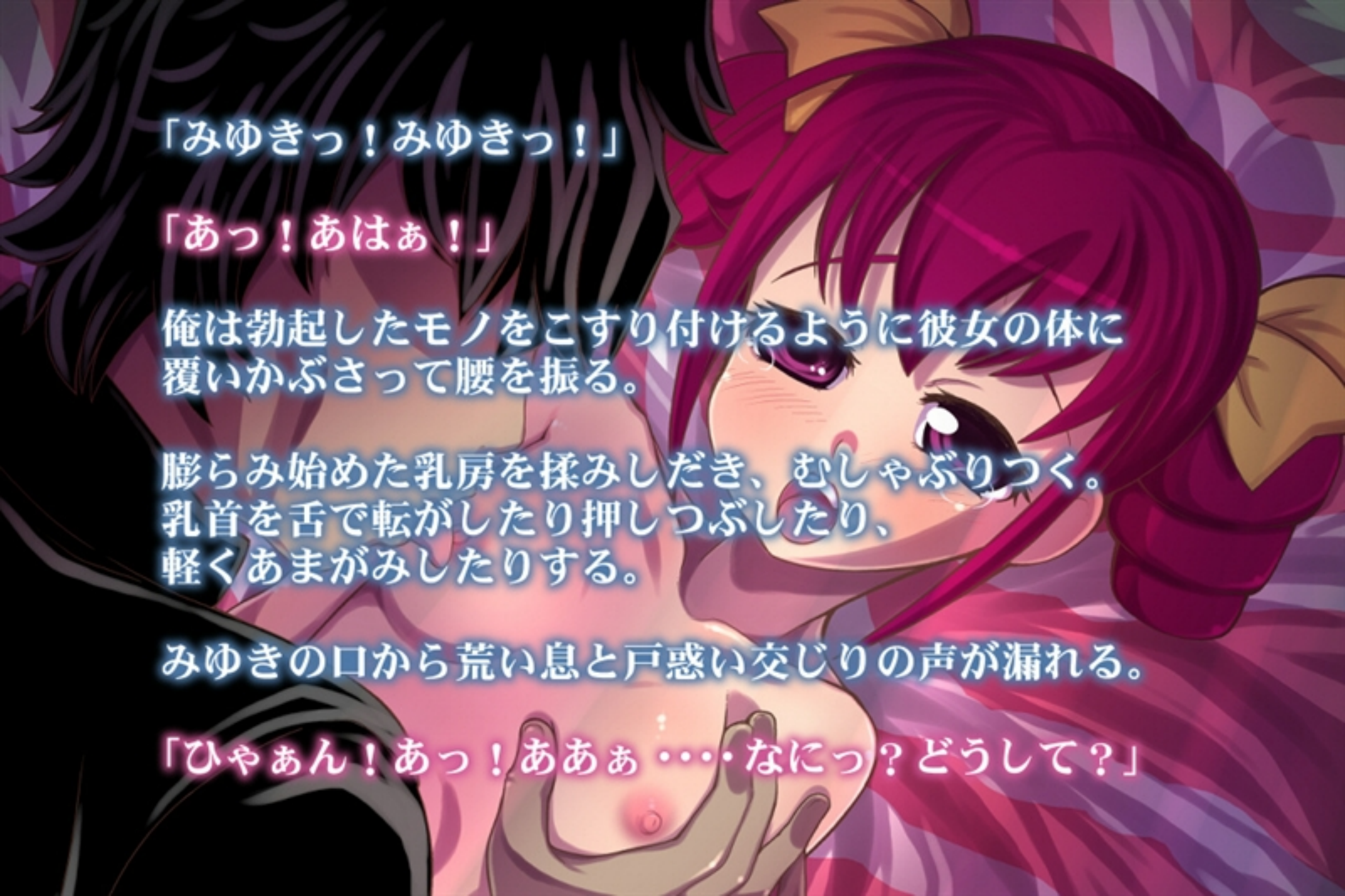
びん

あーん

あーん

あーん

あーん



「みゆきっ！みゆきっ！」

「あっ！あはあ！」

俺は勃起したモノをこすり付けるように彼女の体に覆いかぶさって腰を振る。

膨らみ始めた乳房を揉みしだき、むしゃぶりつく。乳首を舌で転がしたり押しつぶしたり、軽くあまがみしたりする。

みゆきの口から荒い息と戸惑い交じりの声が漏れる。

「ひゃあん！あっ！あああ……なにっ？どうして？」





「ちゅばっちゅば…ウッ……！」
夢中になってみゆきの体を嘗め回す。

陰部を舐めているときに、俺は射精してしまった。
体中がたまらなくキモチイイ。

これがあの老婆の薬の効果なのか。
おそらくみゆきも快楽に支配されて抵抗できずに
いるのだろう。

クリトリスを舐め上げるとビクビクと体を震わせ、
甲高い悲鳴にも似た喘ぎ声を上げ始めていた。

「気持ち良いのか？みゆき、オマンコいいのか？」





「ひあああ……あついよお……ここが……
ああ……おかしくなりそうだよお……」

俺がズボンを脱ぐと、その間にみゆきは
股間に手を伸ばしてヒクついていた。

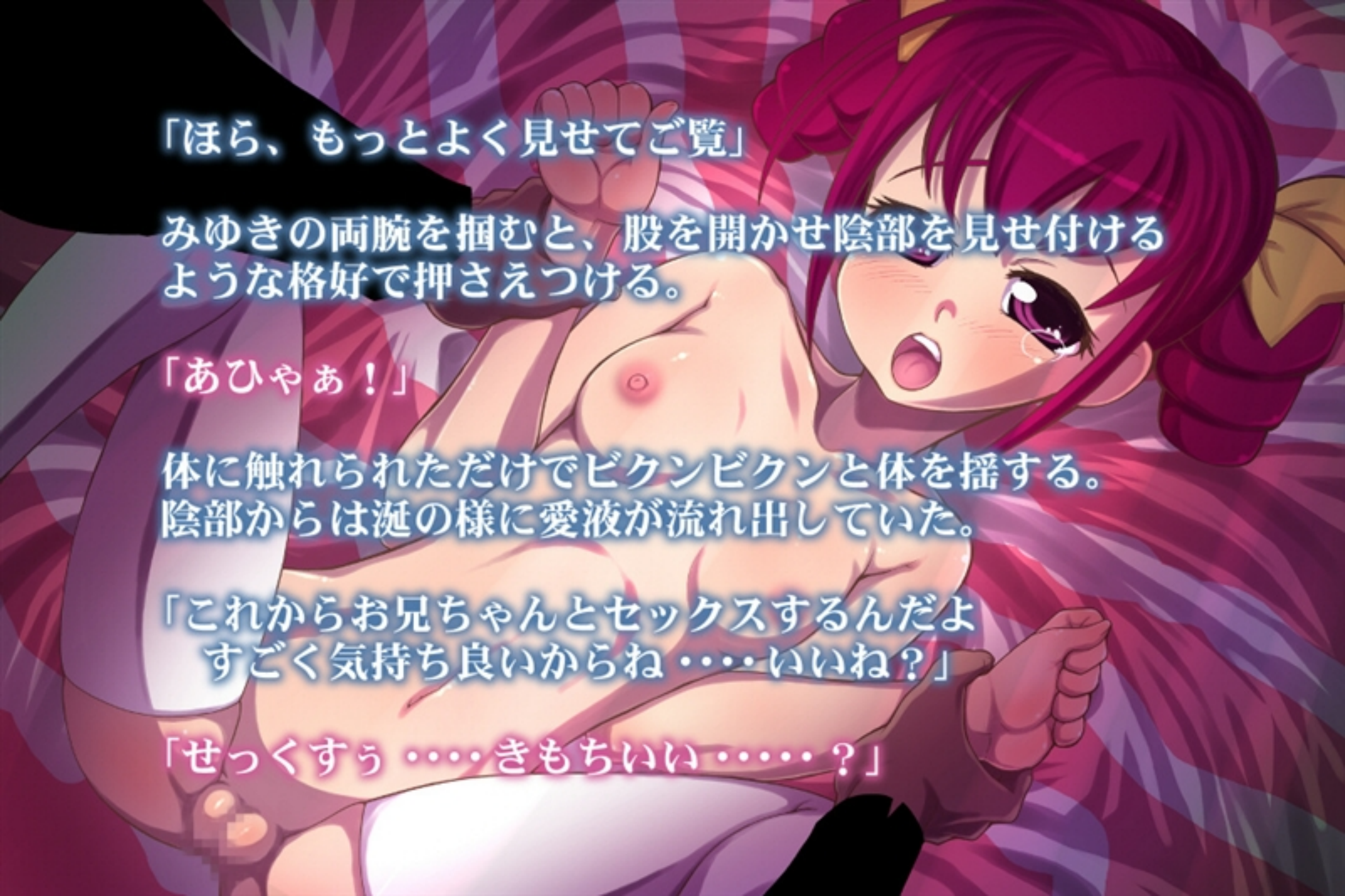
「どうしたの？ たまらないみたいだね」

「おにいちゃん……あああ、あたし、あたしい」

指がもじもじと陰部を弄っている。
俺に舐められてそこが気持ち良い部分と
知ってしまったのだろうか。







「ほら、もっとよく見せてご覧」

みゆきの両腕を掴むと、股を開かせ陰部を見せ付けるような格好で押さえつける。

「あひゃあ！」

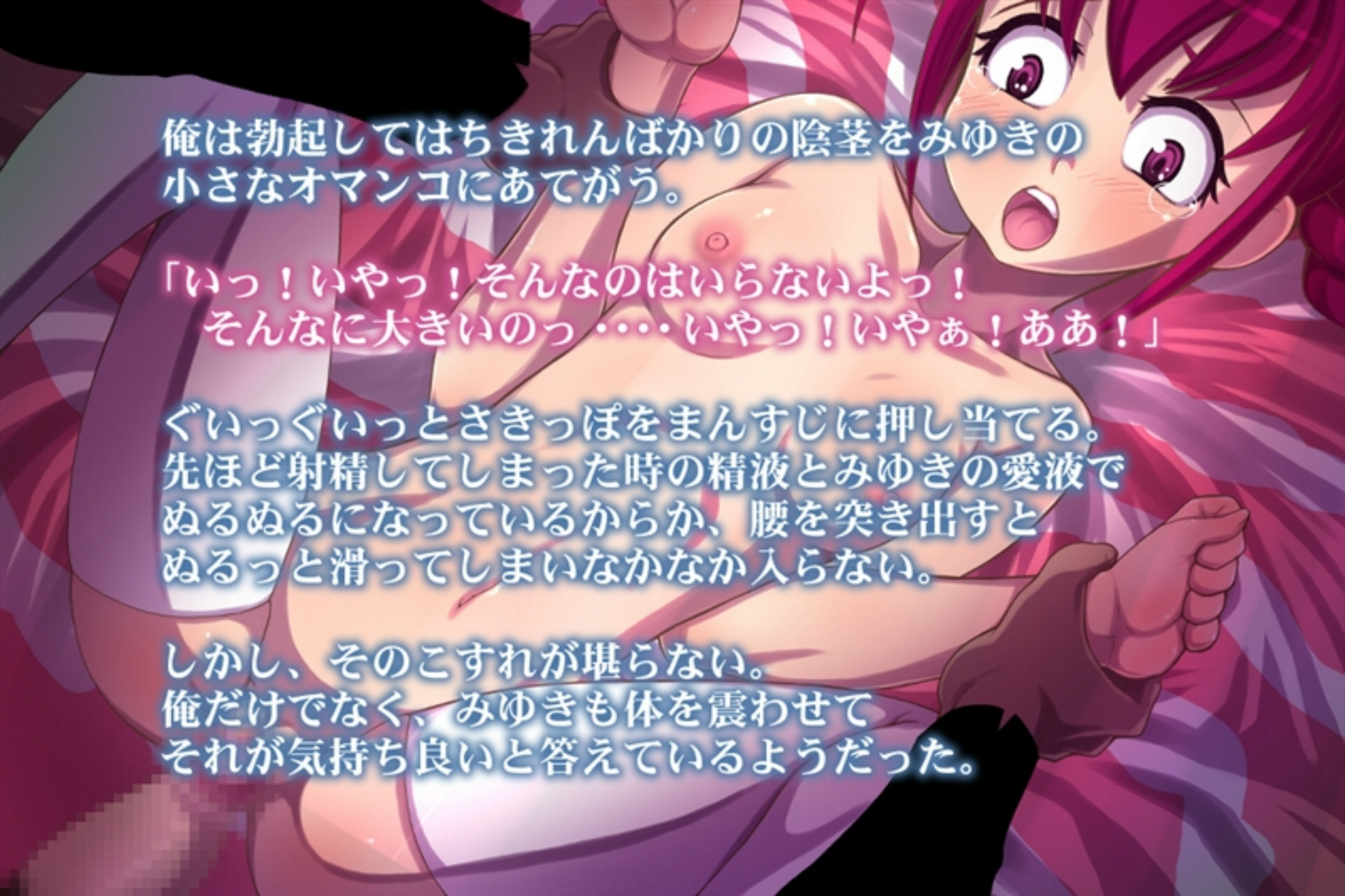
体に触れられたただけでビクンビクンと体を揺する。陰部からは涎の様に愛液が流れ出していた。

「これからお兄ちゃんとセックスするんだよ
すごく気持ち良いからね……いいね？」

「せっくすう……きもちいい……？」







俺は勃起してはちきれんばかりの陰茎をみゆきの
小さなオマンコにあてがう。

「いっ！いやっ！そんなのはいらないよっ！
そんなに大きいのっ……いやっ！いやあ！ああ！」

ぐいっぐいっとなさきっぱをまんすじに押し当てる。
先ほど射精してしまった時の精液とみゆきの愛液で
ぬるぬるになっているからか、腰を突き出すと
ぬるっと滑ってしまいなかなか入らない。

しかし、そのこすれが堪らない。
俺だけでなく、みゆきも体を震わせて
それが気持ち良いと答えているようだった。







ぬぶっ……

「あッ……！」

みゆきの形容しがたい、悶絶したような表情と声。
はちきれんばかりに勃起した肉棒はみゆきの狭すぎる
入り口をみちみちと入り込んでいく。

初めての証拠である血痕が流れる。
その赤みに俺は絶対的な満足感と達成感を得ていた。

「あああ……みゆきっ……みゆきい」

腰を振るまもなく、俺は限界に達していた。







「やばいっでるう」

快感に支配されてるとはいえ、二回目の射精は俺に少しだけの冷静さを取り戻させていた。

中出ししてしまうのはまずい、俺は射精感を堪え、みゆきの中から陰茎を抜く。

「あああ！らめっ！らめえ！」

みゆきは抜けた陰茎に手を伸ばすと、それを入れるとばかりに腰を浮かして求めてきた。

「やっ、ばかやめっ！あっ！ウッ！ウウウ！」





あひひひ

あひひひ

あひひひ
んんん

んんん

んんん



どびゅっ びゅばぼっ

みゆきの手握られて、俺は射精してしまう。

「ウッ！ウッ！うう！」

陰茎の根元をみゆきの陰部にこすりつけるように腰を何度も突き出し、より多くの快感を得ようと体が勝手にのけぞっていた。

凄まじい量の精液が飛び散り、みゆきの顔にまで届いている。

「ああ！あはあ！あはあ！」







どろどろになったみゆきがベッドに横たわっている。
物足りなさそうに、精液でぬるついた手で、
陰部をいじくりながら。

「おにいちゃんっおにいちゃんっ……ンッ！んあ！」

薬の性でケダモノになってしまった俺。
そして、同じく獣になって快楽を求めて
白濁液にまみれながら体をまさぐるみゆき。

「みゆきっ……みゆきッ……」

俺の過ちが始まってしまった。最悪の結末へ進む、
俺の過ちが、俺とみゆきの中に……。 続く





F0 DRY #3

F0 DRY #3

F0 DRY #3

F0 DRY #3

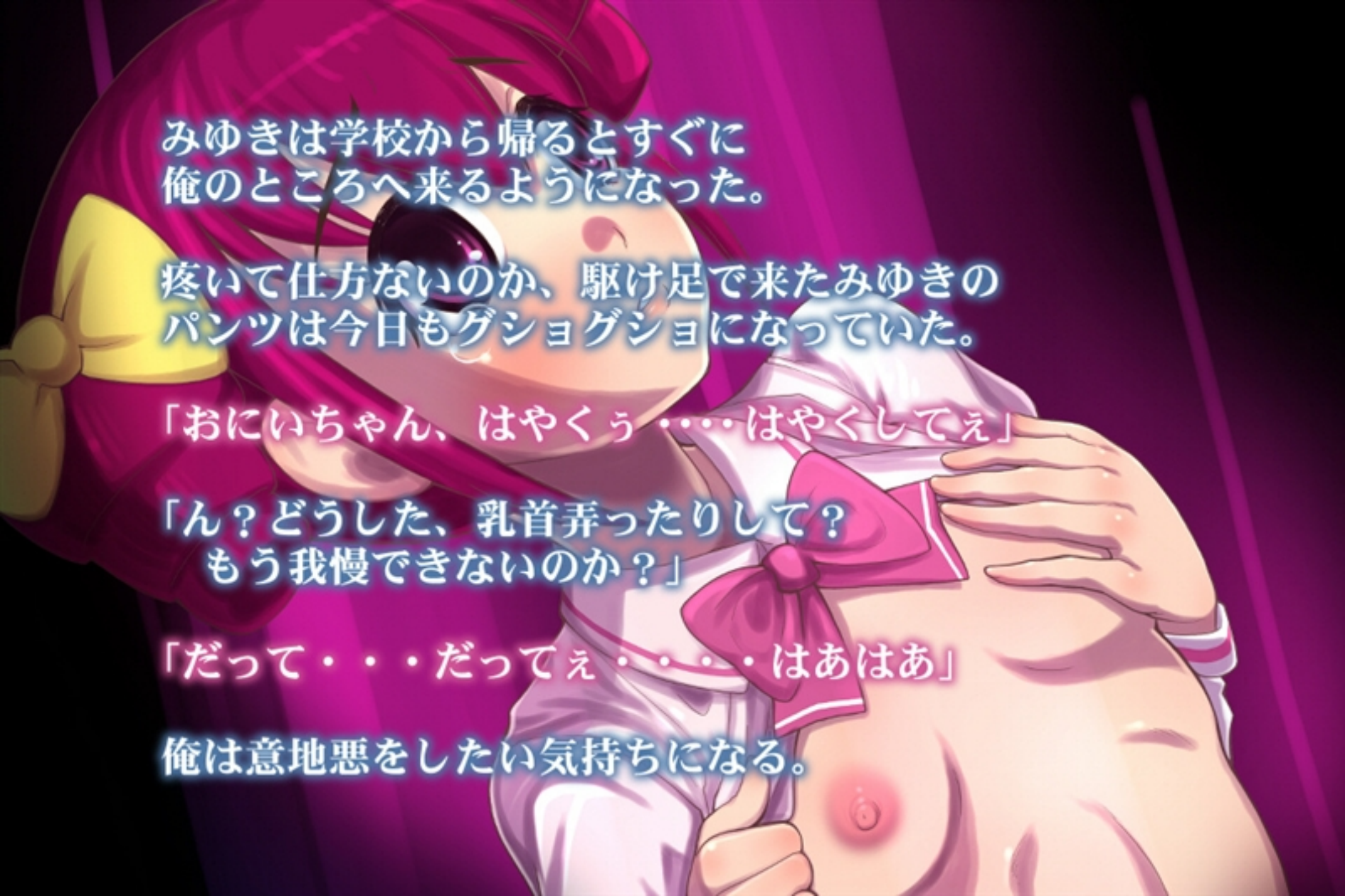
F0 DRY #3

F0 DRY #3

F0 DRY #3

F0 DRY #3

H-H-H
H-H-H



みゆきは学校から帰るとすぐに
俺のところへ来るようになった。

疼いて仕方ないのか、駆け足で来たみゆきの
パンツは今日もグショグショになっていた。

「おにいちゃん、はやくう……はやくしてえ」

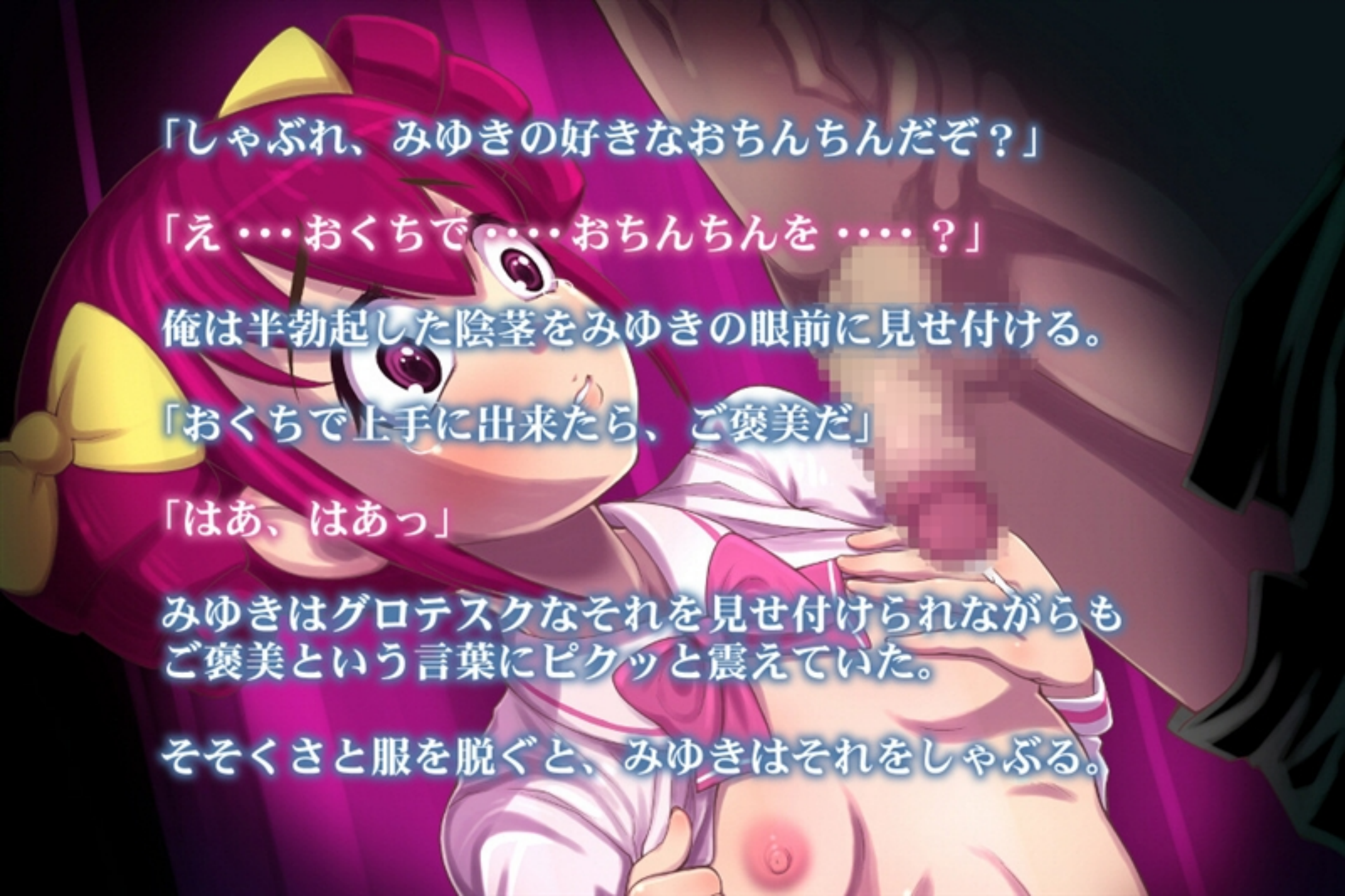
「ん？どうした、乳首弄ったりして？
もう我慢できないのか？」

「だって……だってえ……はあはあ」

俺は意地悪をしたい気持ちになる。







「しゃぶれ、みゆきの好きなおちんちんだぞ？」

「え…おくちで…おちんちんを…？」

俺は半勃起した陰茎をみゆきの眼前に見せ付ける。

「おくちで上手に出来たら、ご褒美だ」

「はあ、はあっ」

みゆきはグロテスクなそれを見せ付けられながらも
ご褒美という言葉にピクッと震えていた。

そそくさと服を脱ぐと、みゆきはそれをしゃぶる。







「れろっれろっ……あぁぁ……はあっ はあっ」

「ウッ……」

みゆきは慣れない手つきでそれを握ると、
ソフトクリームを舐めるように先端を舐めあげる。

「れろっ！れろお！」

「うう、上手だよ……初めて舐めるのに、スゴイな」

「れろっれろっ……」

らって……おにいちゃんに……気持ちよくなって
欲しいし……ご褒美も欲しいの……」







「はあ、はあ、っそうか、じゃあもっと激しく……」

「おむう……」

俺は頭を掴んで無理矢理口の中に陰茎を差し込む。
柔らかい唇が唾液と先走り汁でぬめぬめとしていて
とても卑猥で艶やかな色をしていた。

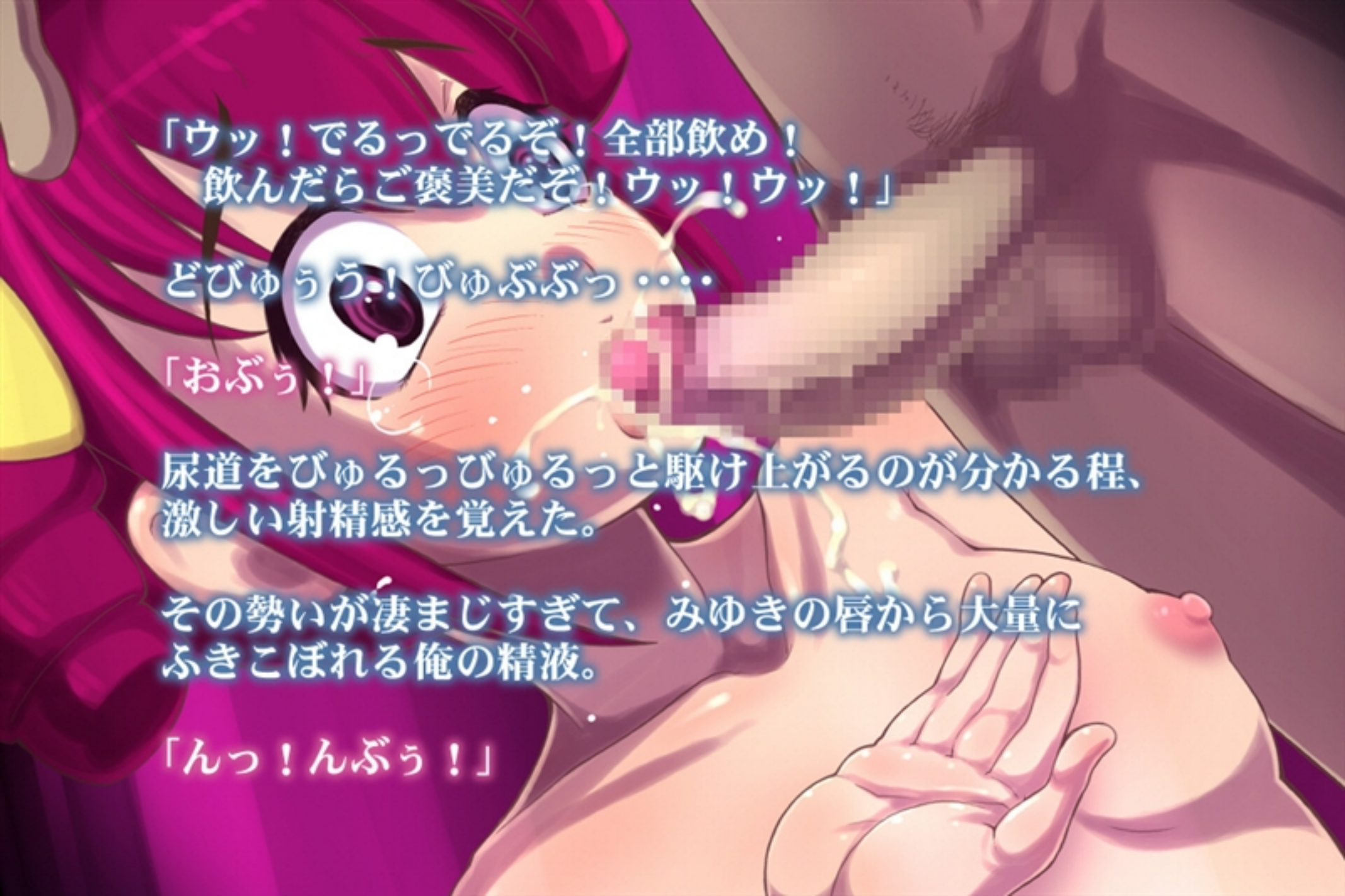
「あああ……吸うんだよ、涎と一緒に……
そう、べろべろしながら吸うんだ……ああ……」

「ちゅばっちゅばっんむう……」

涙をためたみゆきの顔に、俺は絶頂を迎える。







「ウッ！でるっでるぞ！全部飲め！
飲んだらご褒美だぞ！ウッ！ウッ！」

どびゅうう！びゅぶぶっ……

「おぶう！」

尿道をびゅるっびゅるっと駆け上がるのが分かる程、
激しい射精感を覚えた。

その勢いが凄まじすぎて、みゆきの唇から大量に
ふきこぼれる俺の精液。

「んっ！んぶう！」







「けふっげふう！はあっ！はあっ！」

唇から大量に垂れている精液を、こぼさないように
けなげに手で受け止めるみゆき。

「残念だな……全部飲めなかったね」

「あうっ……はうう……
らって……すごいびゅうって……はあはあ」

精液を涎の様に垂らしながら潤んだ目でご褒美を
懇願するみゆき。





おはよう



「じゃあもう一回だ、ほらっ」

俺はそのけなげなみゆきをさらに穢したくなる。
もっと乱暴に腰を突き出し、口に陰茎をつき立てた。

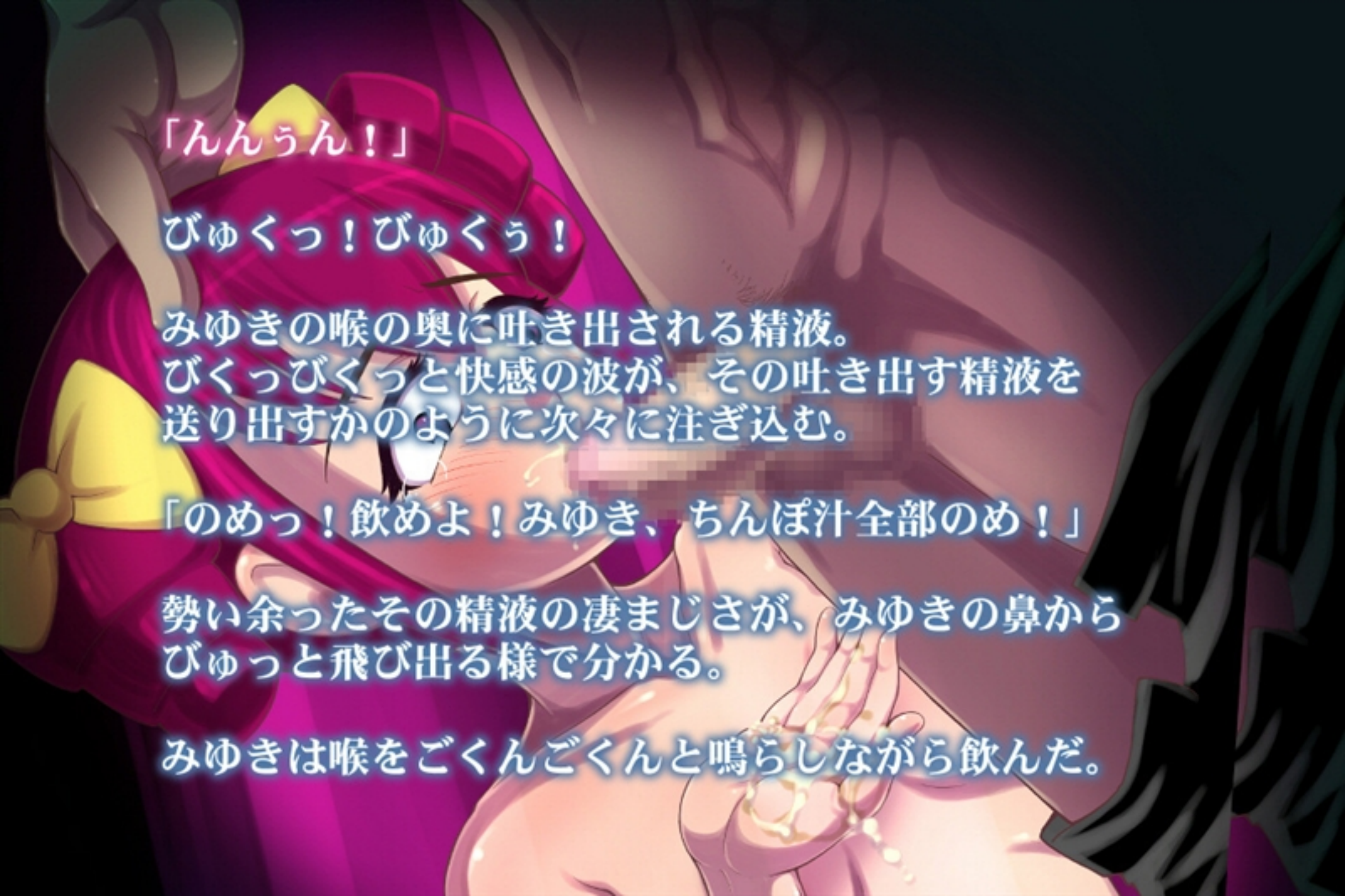
「おむう！おぶううう！」

嗚咽と悲鳴が混じった音が、みゆきの喉から鳴る。
同時にその音の振動が俺の陰茎を震わせ、
とてつもない快樂を与えてきた。

「ああ！みゆきっみゆきっ！すげえ、ちんぽいく、
ちんぽいくぞ！みゆきの喉奥でいくっイクッ！」







「んんうん！」

びゅくっ！びゅくう！

みゆきの喉の奥に吐き出される精液。
びくっびくっ快感の波が、その吐き出す精液を
送り出すかのように次々に注ぎ込む。

「のめっ！飲めよ！みゆき、ちんぽ汁全部のめ！」

勢い余ったその精液の凄まじさが、みゆきの鼻から
びゅっと飛び出る様で分かる。

みゆきは喉をごくんごくんと鳴らしながら飲んだ。







「ふひゅう、ふひゅう、はあはあ……」

口の周りを精液でどろっどろにして、
みゆきは潤んだ目で俺を見上げていた。

「フフフ、よく頑張ったな……
ご褒美は明日上げるからな」

「ご褒美……はあぁ……」

俺は暴走し始めた性欲に突き動かされ、
次の快感を得る手法を考えて震えていた。

みゆきは俺の性奴隷……そう思っていた。 続く

「そろそろ仕上げだわさ、
いいかい、膣の中で射精したら、
それが終わりの合図だよ

すべてを失うんだ、終わりの始まり、
なあと、魔法ってのはそういうもんだわさ

あんたは大事なものを汚してから手に入れて、
そしてけがれたまま失う、

膨大なバッドエナジーを放出して
終わりの始まりを迎えるだわさ……！」

BAD ENVI!!







「おにいちゃん、はやくーう……」

俺ははっとする。
夕べ見た夢を思い出してぼんやりしていたようだ。

今日はどうだつの上がないロリ仲間をあつめて
俺の性奴隷を楽しむ会を開いていた。

「おおおお～みゆきたんブルマ姿で大股開き！」

「これはロリ好きにはたまりませんぞお～！
乳首もコリコリに勃起しちゃってえ～」

「みゆき、ご褒美だ、いっぱい可愛がってやる」







「あっ！あ あ〜っ！」

ブルマの上からクリトリスを乱暴に舐め上げると、みゆきは震えながら歓喜の喘ぎ声を漏らしていた。

「すげえ……めちゃめちゃ開発されておりますな」

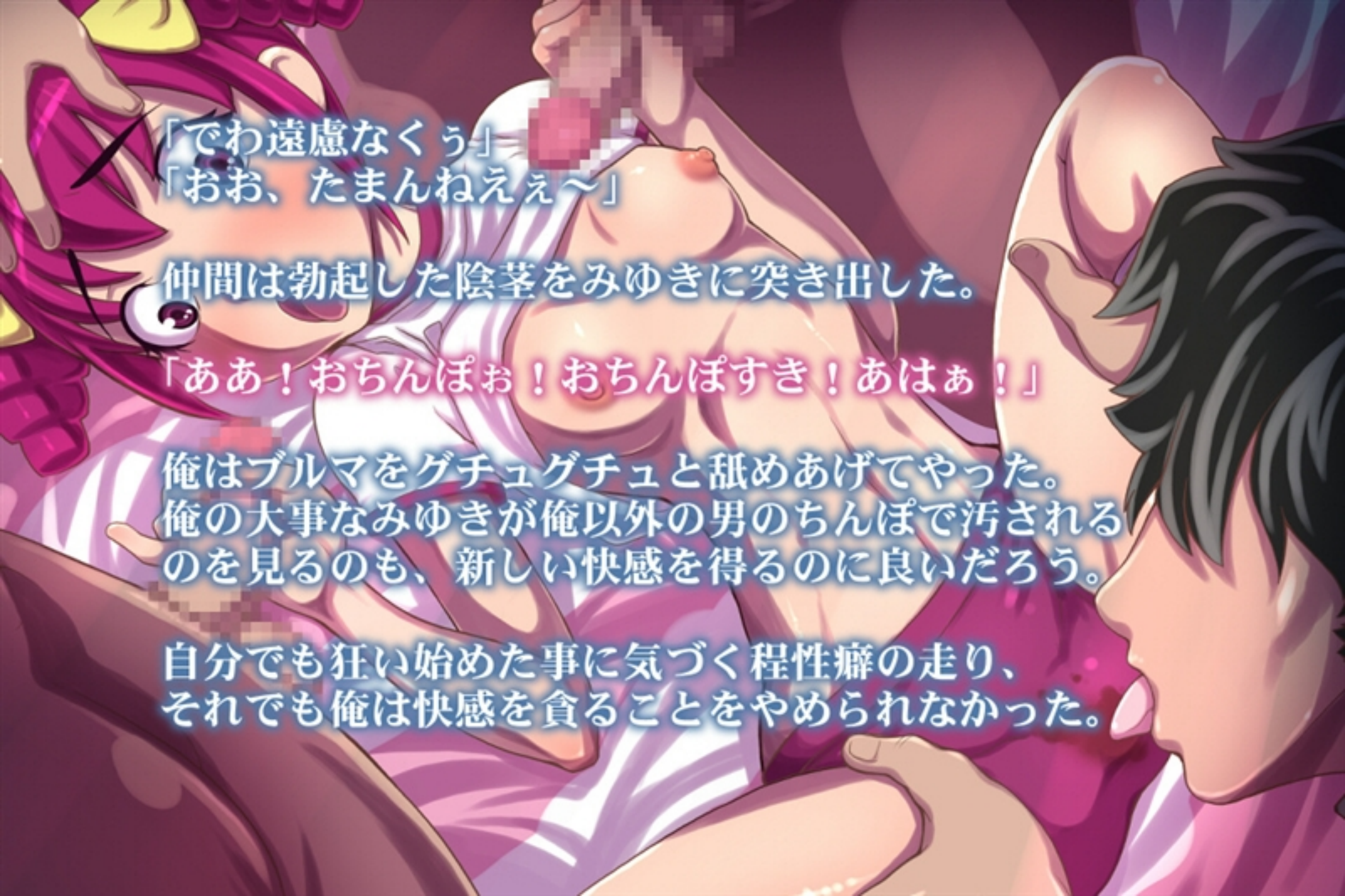
「こんな可愛い子がこんなビッチになってしまうなんて……例の薬めちゃ欲しいですぞ〜！」

「おまえら、しゃぶってもらえよ、みゆき、お友達にご挨拶しろ」

「あはあ！ああ……お、おちんちん……欲しい……」







「でわ遠慮なくう」
「おお、たまんねええ〜」

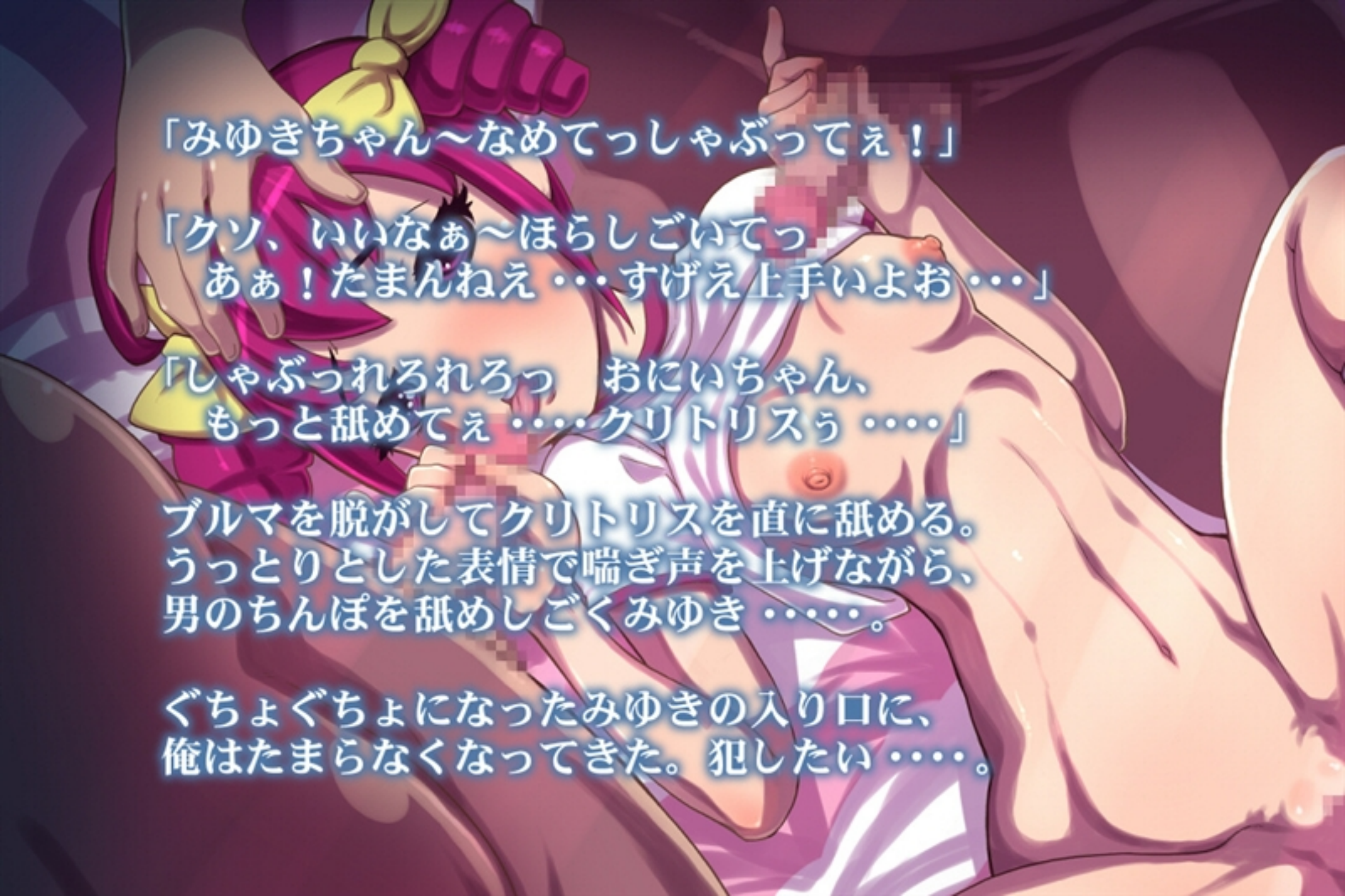
仲間は勃起した陰茎をみゆきに突き出した。

「ああ！おちんぽお！おちんぽすき！あはあ！」

俺はブルマをグチュグチュと舐めあげてやった。
俺の大事なみゆきが俺以外の男のちんぽで汚される
のを見るのも、新しい快感を得るのに良いだろう。

自分でも狂い始めた事に気づく程性癖の走り、
それでも俺は快感を貪ることをやめられなかった。





「みゆきちゃん～なめてっしゅぶってえ！」

「クソ、いいなあ～ほらしごいてっ
ああ！たまんねえ・・・すげえ上手いよお・・・」

「しゃぶっれるろっ おにいちゃん、
もっと舐めてえ・・・クリトリスう・・・」

ブルマを脱がしてクリトリスを直に舐める。
うっとりとした表情で喘ぎ声を上げながら、
男のちんぽを舐めしごくみゆき・・・。

ぐちょぐちょになったみゆきの入り口に、
俺はたまらなくなってきた。犯したい・・・。





「よし、全裸になれ、みゆき、おねだりしてみろ」

「あー、ブルマ脱がせてしまうのですかあ〜！」

「体操着アゲだったのに……」

「俺のコレクションがおまえらの汗臭くなるのは困るからな、ほら、みゆき、おねだりは？」

みゆきはピクピクふるえながら、腰をくねらせて俺の挿入を待ちわびていた。

「おっ、おにいちゃあん、きて……おまんこにい
お兄ちゃんのおちんぽお……ぶっさしてえ……
めちゃくちやに突いてえ……はやくうはやくう！」







「ああ、みゆきっみゆきっ！」

「あはあ！あくっ……あああ！ああああ！」

華奢な体を抱きかかえて、みゆきの中に突き入る。薄汚い男達に見られながら、みゆきはビクビクと体を痙攣させて感じていた。

みゆきの中がいつもよりぬるついて、ヒクついて、耐え切れない快感の波が絶え間なく押し寄せた。

「あはあ！いいっ！おにいちゃんっ！ちんぽお！」

「あああっ……みゆきいっ……あ！あうう！」







びゅくっ……

中に出す。みゆきの膣の中に、俺は射精してしまう。
今まで漠然とした恐怖で犯さなかったその行為を、
俺はついに犯してしまった。

もとより引き返せない過ちを重ねてきたのに。

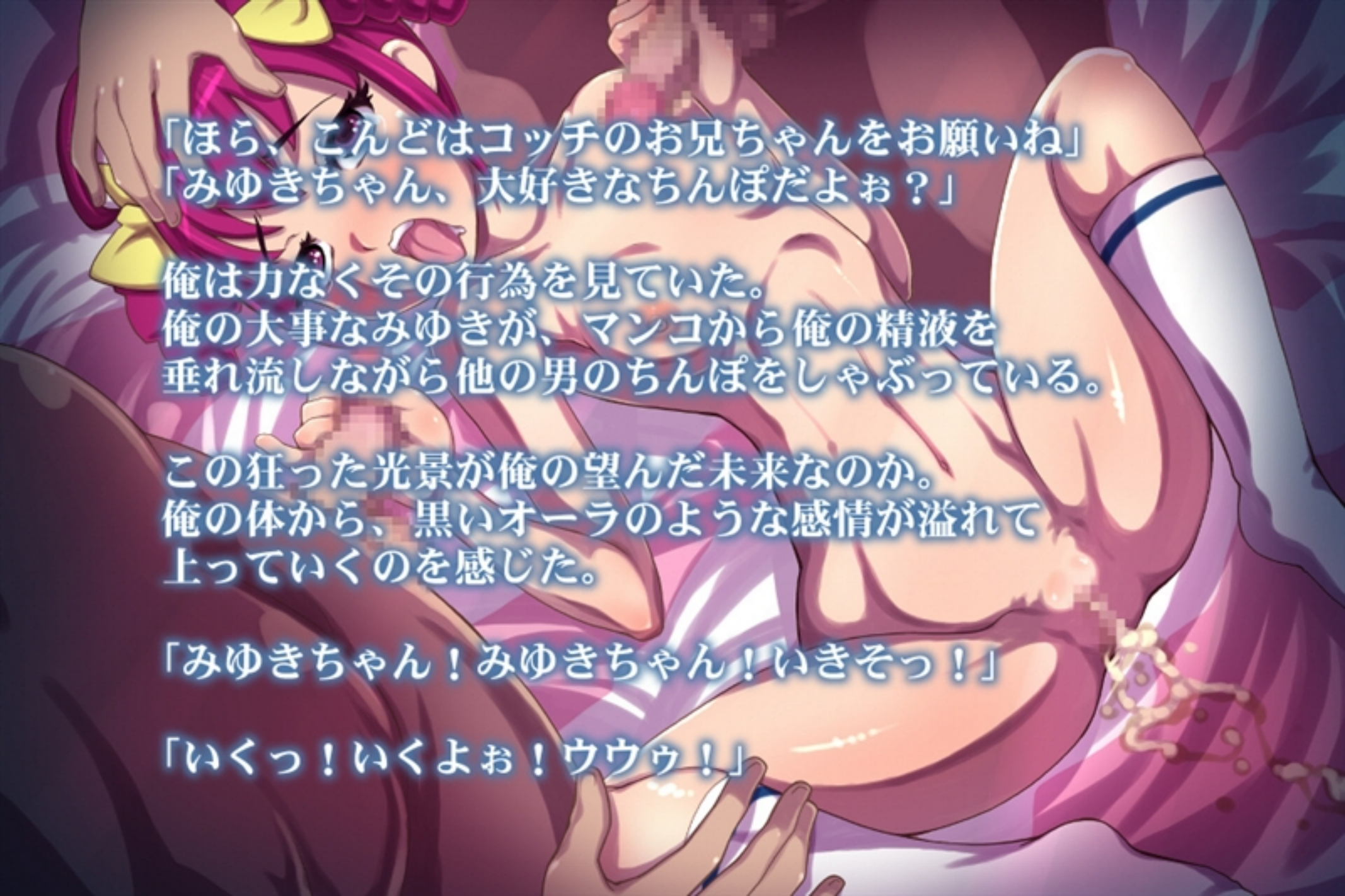
俺の陰茎は俺の意思を離れ、まるで別の生き物の様に
みゆきの膣の中を穢れた白濁液で満たしていった。

「あひい！あひいい！」

狂ったようにみゆきが絶頂している。







「ほら、こんどはコッチのお兄ちゃんをお願いね」
「みゆきちゃん、大好きなちんぽだよお？」

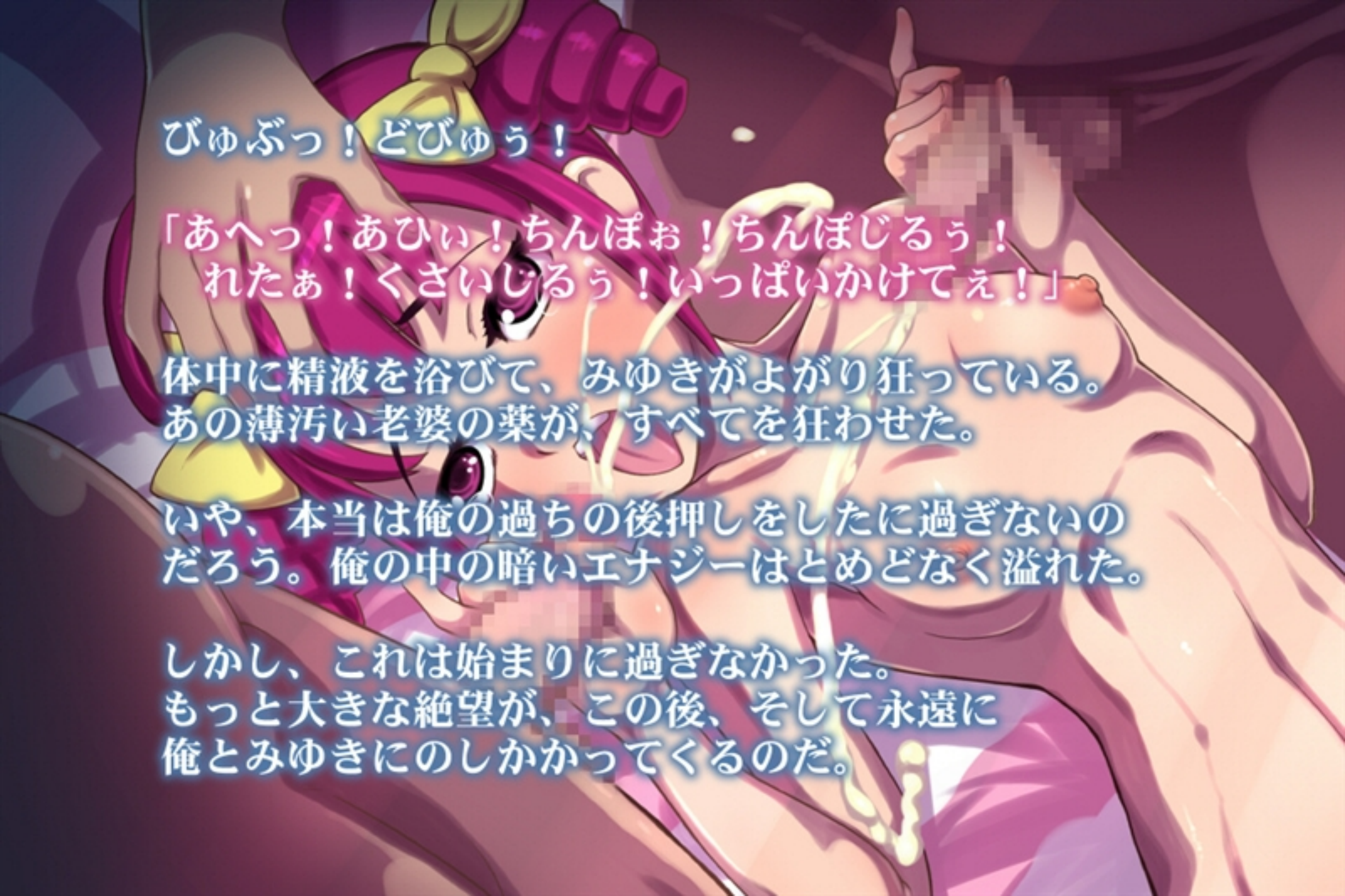
俺は力なくその行為を見ていた。
俺の大事なみゆきが、マンコから俺の精液を
垂れ流しながら他の男のちんぽをしゃぶっている。

この狂った光景が俺の望んだ未来なのか。
俺の体から、黒いオーラのような感情が溢れて
上っていくのを感じた。

「みゆきちゃん！みゆきちゃん！いきそっ！」

「いくっ！いくよお！ウウウ！」





びゅぶっ！どびゅう！

「あへっ！あひい！ちんぽお！ちんぽじるう！
れたあ！くさいじるう！いっぱいかけてえ！」

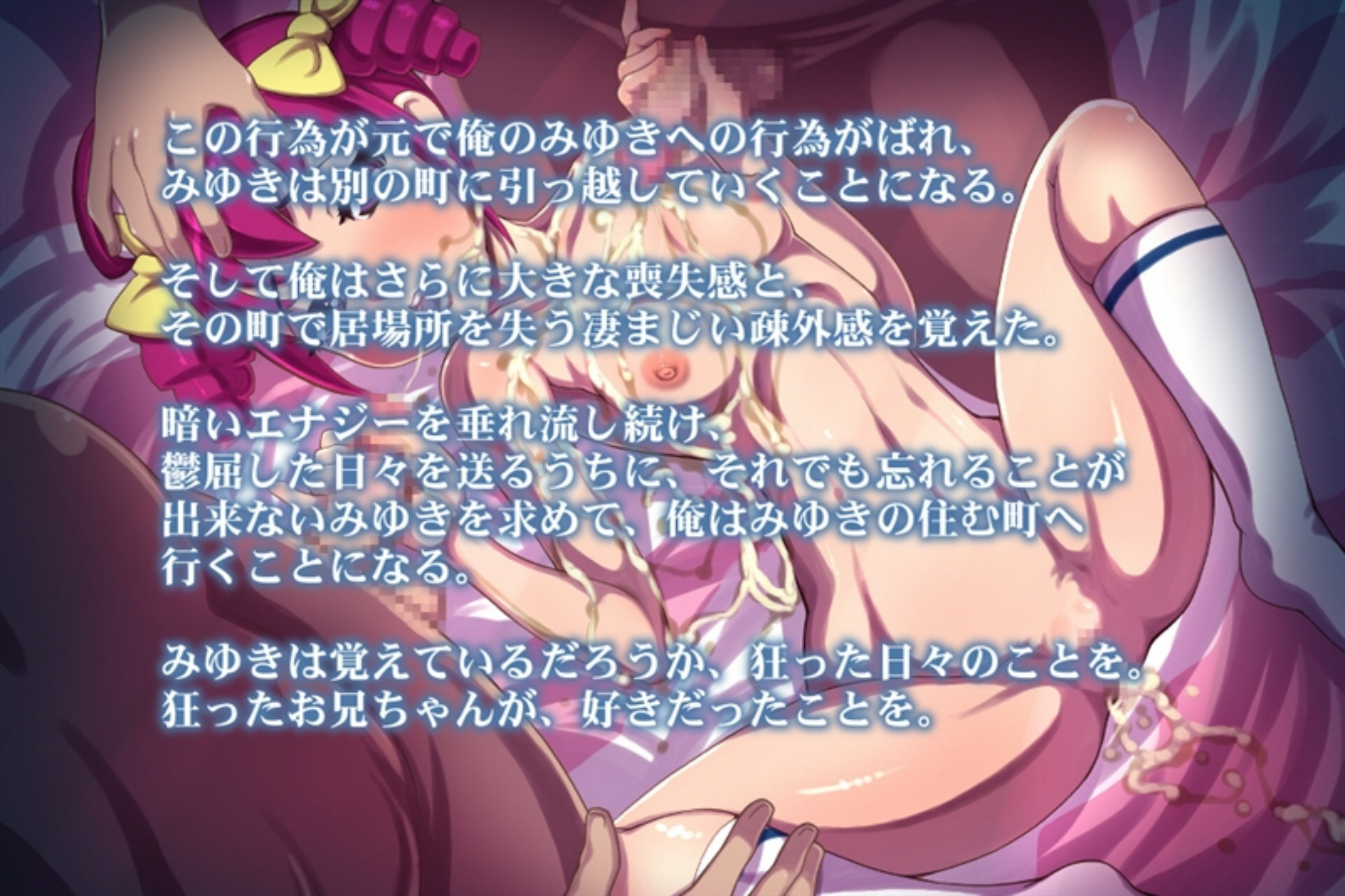
体中に精液を浴びて、みゆきがよがり狂っている。
あの薄汚い老婆の薬が、すべてを狂わせた。

いや、本当は俺の過ちの後押しをしたに過ぎないの
だろう。俺の中の暗いエネルギーはとめどなく溢れた。

しかし、これは始まりに過ぎなかった。
もっと大きな絶望が、この後、そして永遠に
俺とみゆきにのしかかってくるのだ。







この行為が元で俺のみゆきへの行為がばれ、
みゆきは別の町に引っ越していくことになる。

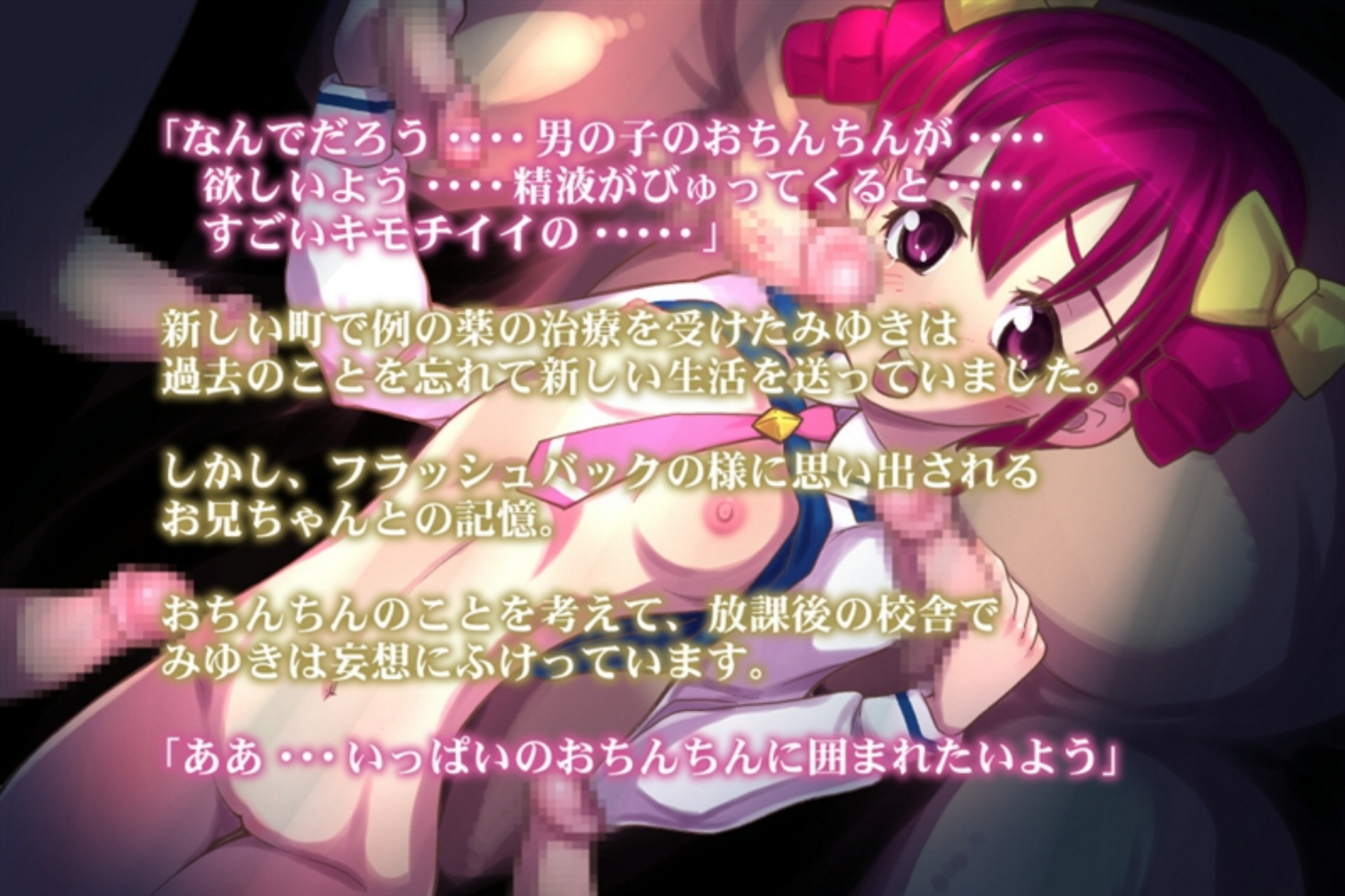
そして俺はさらに大きな喪失感と、
その町で居場所を失う凄まじい疎外感を覚えた。

暗いエナジーを垂れ流し続け、
鬱屈した日々を送るうちに、それでも忘れることが
出来ないみゆきを求めて、俺はみゆきの住む町へ
行くことになる。

みゆきは覚えているだろうか、狂った日々のことを。
狂ったお兄ちゃんが、好きだったことを。







「なんでだろう …… 男の子のおちんちんが ……
欲しいよう …… 精液がびゅってくると ……
すごいキモチイイの ……」

新しい町で例の薬の治療を受けたみゆきは
過去のことを忘れて新しい生活を送っていました。

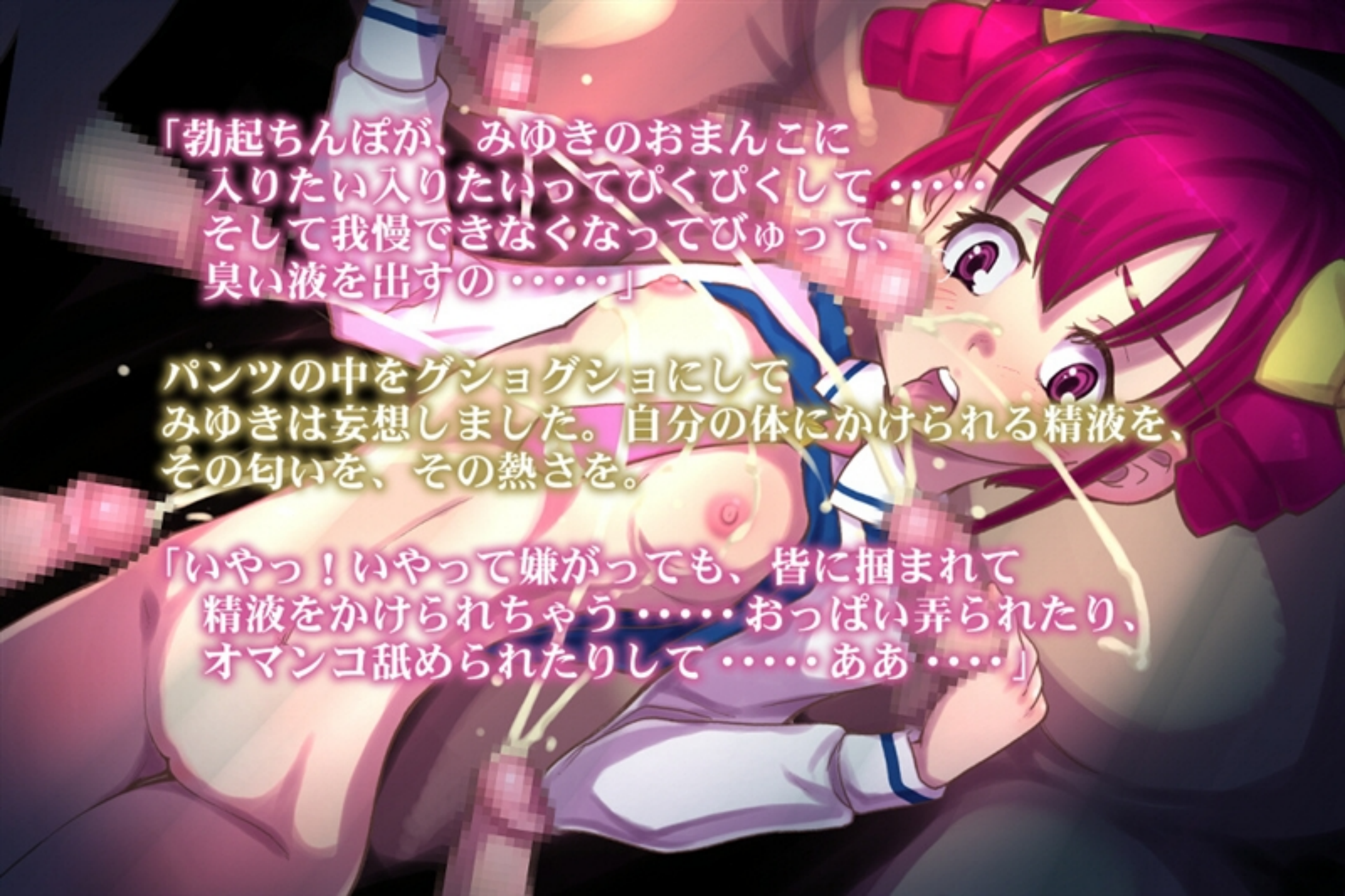
しかし、フラッシュバックの様に思い出される
お兄ちゃんとの記憶。

おちんちんのことを考えて、放課後の校舎で
みゆきは妄想にふけています。

「ああ …… いっぱいのおちんちんに囲まれたいよう」







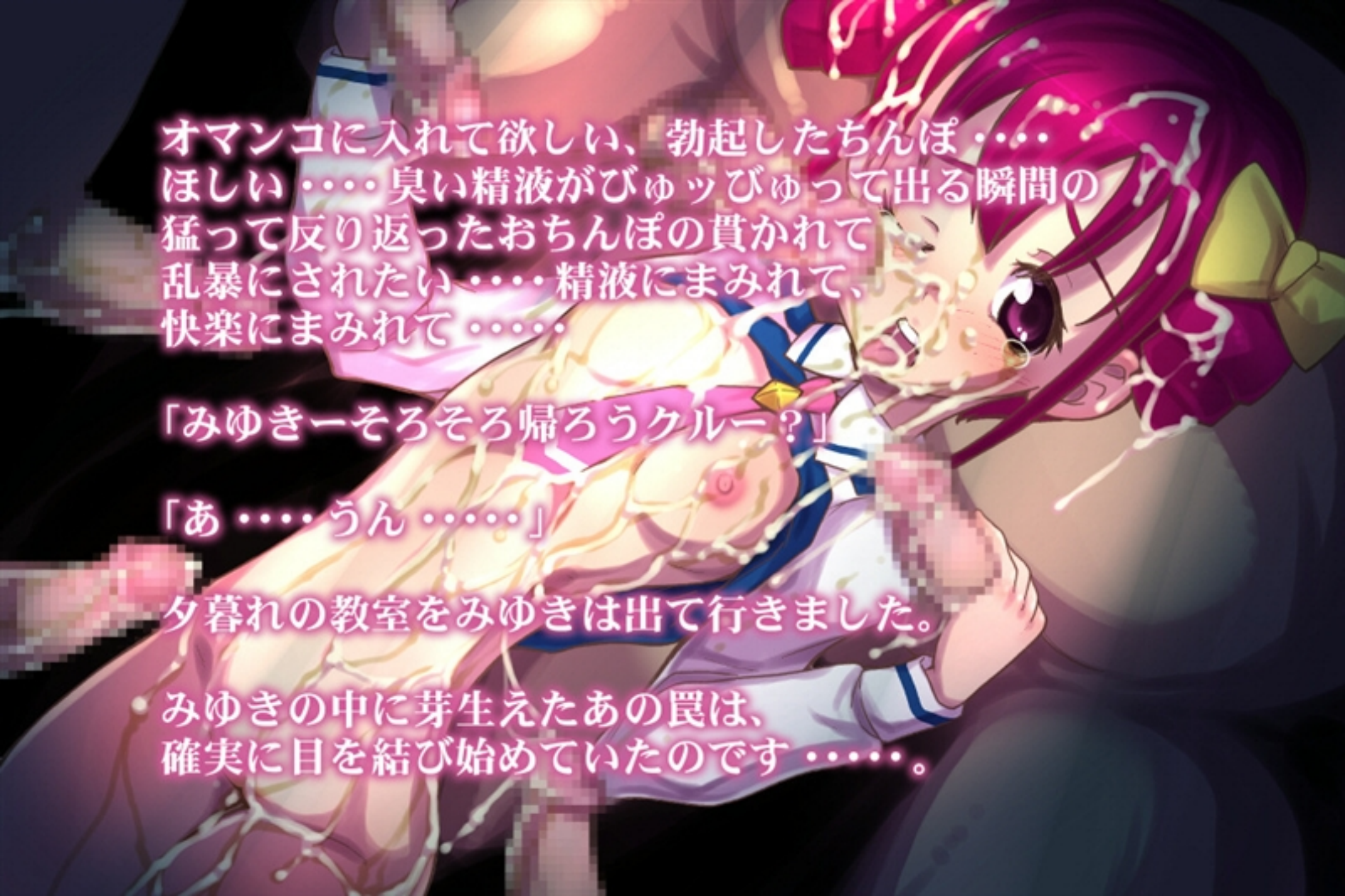
「勃起ちんぽが、みゆきのおまんこに
入りたい入りたいってぴくぴくして……
そして我慢できなくなっぴゅって、
臭い液を出すの……」

・パンツの中をグショグショにして
みゆきは妄想しました。自分の体にかけられる精液を、
その匂いを、その熱さを。

「いやっ！いやって嫌がっても、皆に掴まれて
精液をかけられちゃう……おっぱい弄られたり、
オマンコ舐められたりして……ああ……」







オマンコに入れて欲しい、勃起したちんぽ…
ほしい…臭い精液がびゅっびゅって出る瞬間の
猛って反り返ったおちんぽの貫かれて
乱暴にされたい…精液にまみれて、
快樂にまみれて……

「みゆきーそろそろ帰ろうクルー？」

「あ……うん……」

夕暮れの教室をみゆきは出て行きました。

みゆきの中に芽生えたあの畏は、
確実に目を結び始めていたのです……。





アキラカシ...

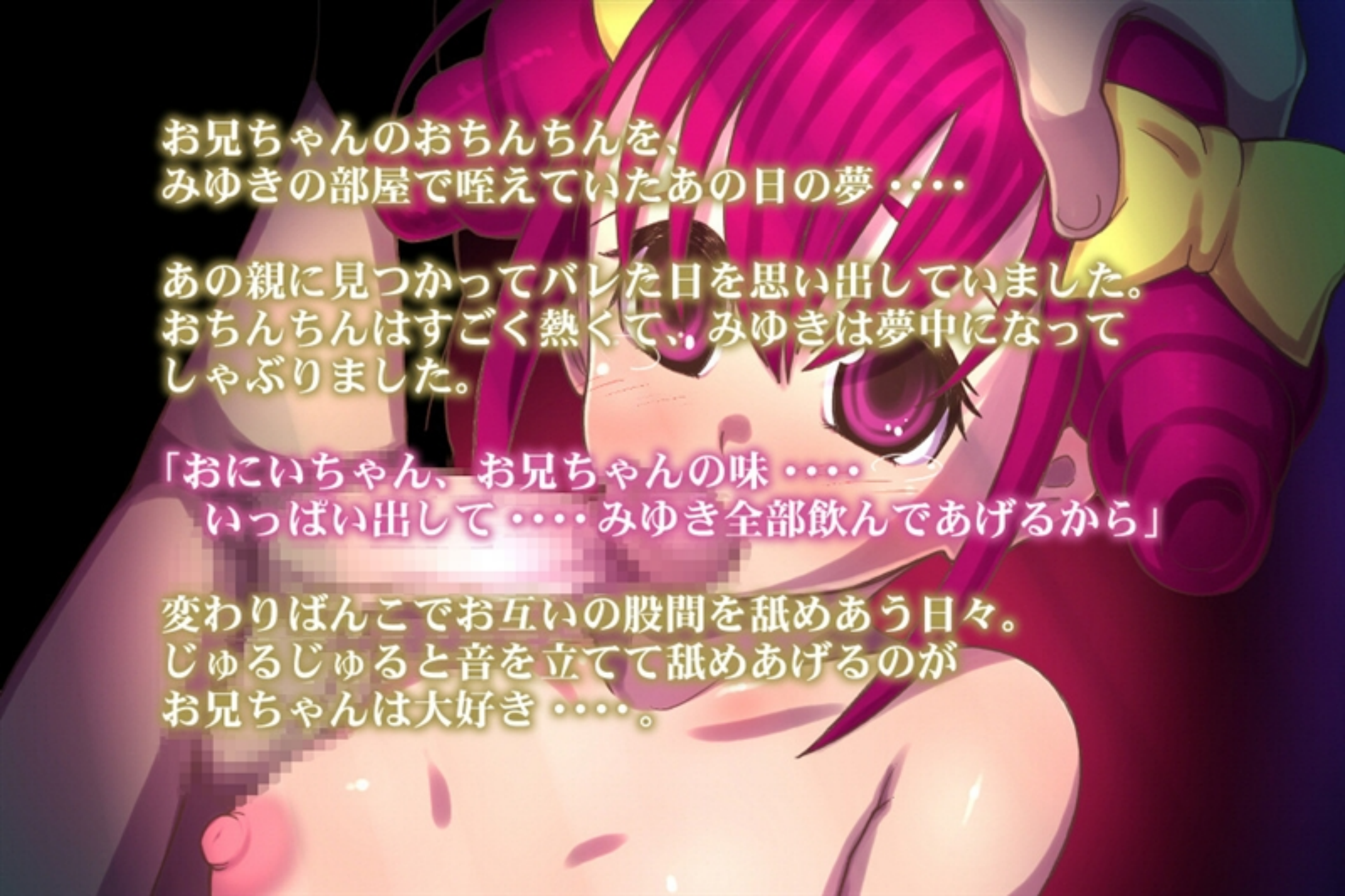
アキラカシ

アキラカシ

アキラカシ

アキラカシ

アキラカシ



お兄ちゃんのおちんちんを、
みゆきの部屋で啜っていたあの日の夢……

あの親に見つかってバレた日を思い出していました。
おちんちんはすごく熱くて、みゆきは夢中になって
しゃぶりました。

「おにいちゃん、お兄ちゃんの味……
いっぱい出して……みゆき全部飲んであげるから」

変わりばんこでお互いの股間を舐めあう日々。
じゅるじゅると音を立てて舐めあげるのが
お兄ちゃん大好き……。







「うぶっ……」

喉の奥に打ち出されるあの勢いのある射精が、
みゆきの体の中、膣の中で打ち出される記憶……

狂おしいほどに気持ちよくて、想像しただけで体が
ムラムラと疼くあの味……。

「お兄ちゃんのちんぽ汁……すごい臭い汁う……
欲しい……いっぱいして欲しい……」

息を荒げて一人記憶を妄想してふけるみゆき。

部屋のドアが開いて、ママの絶望した顔……。





たろろ

〜たろろ〜
たろろ...

たろろ


たろろ...

たろろ...

たろろ...

たろろ...

たろろ



その行為がママを絶望させる行為だと、
その表情で分かってしまったあの日……。

でも、そんな絶望を感じてもなお、
みゆきはあの快楽を欲し始めていました。

「お兄ちゃん……おにいちゃん……

早く……私の舐めてえ……弄って、クリトリスを、
乳首を嘯んで……おちんぽでオマンコおかしてえ……」

お兄ちゃんが近くまで来ている……。
バッドエナジーを振りまいて、
お兄ちゃんが来るのを感じていました。

レイズプリキュア BADEND Ver. Pink
「お兄ちゃんのみゆき」

アニメーション本編へお話が続きます。





ステータス...
か...

グ...

あ...

あ...

あ...

あ...

ズ...

あ...!!

ズ...



「まったく人間のオンナってのは最高だよなあ
犯してよし、食ってよし、特にプリキュア、

性の快楽に狂って、力を発揮できないおまえは」
「オレ様の最高の獲物ッ！おかず！！フハアッ」

ウルフルンに負けて、地下牢に捉えられたハッピー。
ケダモノの猛り狂った性の捌け口に利用されて、
毎日犯されていました。

「犯してぶっ壊れないオンナはお前だけだぜ……
普通の女なら、ぶっ壊れてオシマイさ、
まったくプリキュアってのは便利なもんだなあ！」





「あう！あへえええ！」

「ウルウ！ウルッフウ〜！」

ウルフルンがハッピーの中で絶頂しました。

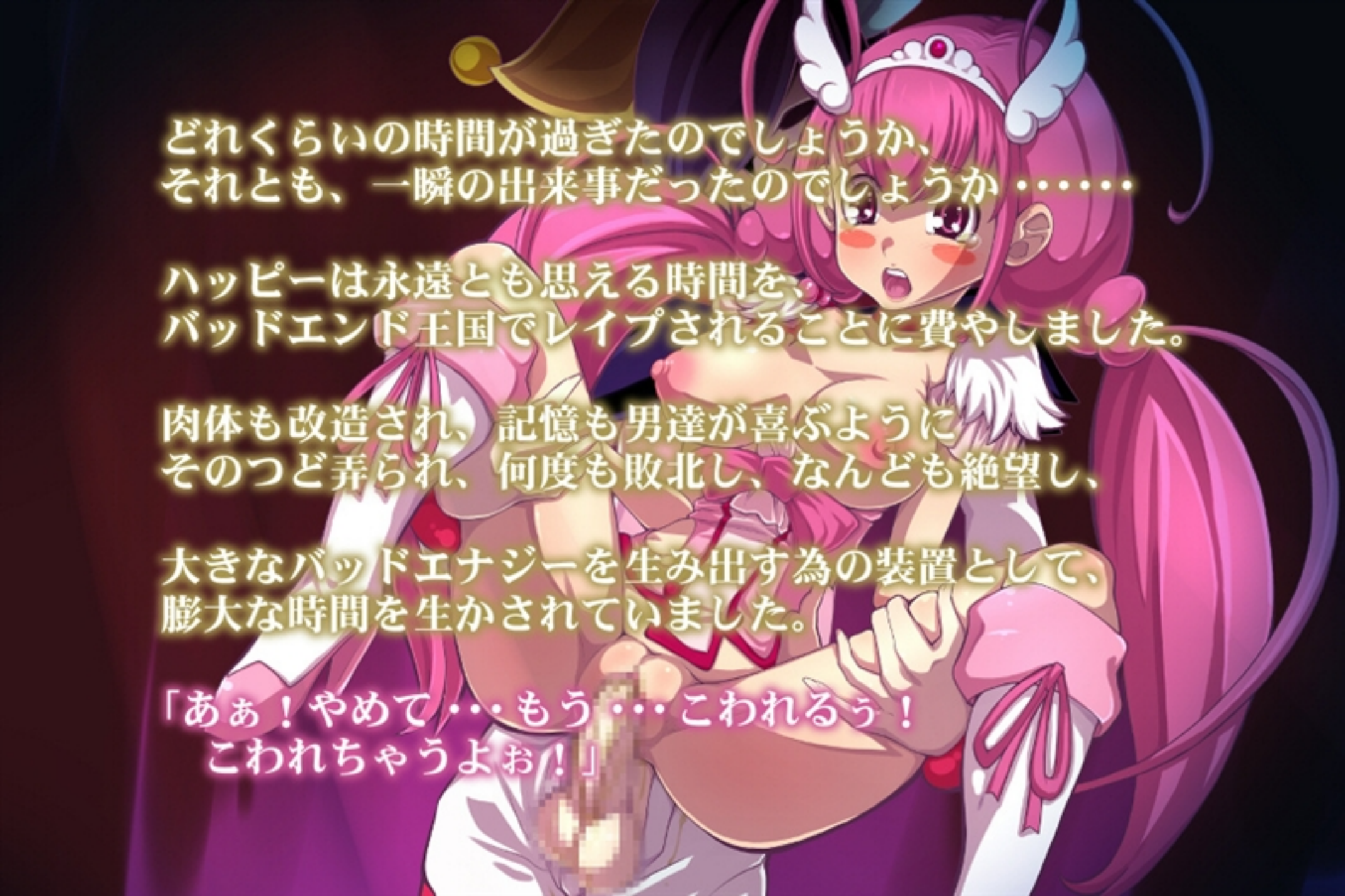
一般人の膣なら凄まじい量と勢いで破れてしまう程
激しいセックスも、プリキュアの力で耐えてしまう、
ハッピーの肉体は、バッドエンド王国の性処理に
使われていました。

「あう！あうう……もっと……もっと犯してえ……」

暗い牢獄で与えられる唯一の感情に溺れていました。







どれくらいの間が過ぎたのでしょうか、
それとも、一瞬の出来事だったのでしょうか……


ハッピーは永遠とも思える時間を、
バッドエンド王国でレイプされることに費やしました。

肉体も改造され、記憶も男達が喜ぶように
そのつど弄られ、何度も敗北し、なんども絶望し、

大きなバッドエナジーを生み出す為の装置として、
膨大な時間を生かされていました。

「ああ！ やめて… もう… こわれるう！
こわれちゃうよお！」





「ウフフ、僕の大好きなハッピーちゃん♪
そろそろぶっ壊れたい？何度もレイプされて、
死ぬより辛い永遠の快樂地獄に落とされて、
狂ったほうが楽になれるもんねえ……あれれえ？」

ハッピーは犯されながら、
自分でクリトリスを弄って愉しんでいました。

「いやっ……こんなの……気持ちいいっ！
イクっ！いやあ！あくっ！いくう！」

「弄られすぎて狂い始めてるね……
オッパイもこんなにいやらしく膨らんじゃって
よく頑張ったね……ご褒美だよ……ふう、ウツ！」





「あへっ！あひひひい〜！」

膣から溢れるジョーカーの精液。
この一瞬だけが、ハッピーの幸福な時間でした。

「ああ…みゆきっ…フフフ…この名前で
呼ばれるのは久しぶりかな…？」

「ああっあたしっ…みゆきっイグッ…」

「人間…醜い物をぶら下げた、特に男ってのはさ、
自分の欲望の為に平気で大事なものを汚すよね
それに気づいてからバッドエンド王国の侵攻は
本当に早かったよ…」





「あひっ……あへえ……もっと……おかして……
レイプして……」

「みんな壊れたよ～、サニーもピースも、
マーチは意外にすぐ壊れたね、ビューティは
結構頑張ったけど……君だけだよ♪
僕が愛してあげられるのは……フフフ……」

暗い暗い物語の底の、もっと暗いところで、
今日もみゆきは、ケダモノ達にハッピーを与えて
そして、絶望を振りまいているのです……。

BAD END